

身近な外国を体感する

長野県長野高等学校 市川正夫

1. はじめに

異文化理解にはいろいろな手法があるが、外国人と接することも一案である。これには生徒は興味をしめすだけでなく、授業に集中することができる。また日本人が普段接することが困難な国の人である場合、生徒にとって印象が強く残る。

近年高等学校では外部講師制度ができ、容易に外国人を呼ぶことができるようになった。そこで招いた外国人により「地理の授業」をしていただくとうい。授業は講義だけでなく、民族衣装を着る、民族楽器を演奏するか民謡を歌ってもらう。また挨拶程度の会話の練習をする、民族料理をつくっていただく。その他宗教・民族がもつ特性やアイデンティティ、日本人に対する考え方などについて講義してもらう。

2. 外国人による「地理授業」を体感する

その国で行っている「地理授業」を実施する。それにはまず事前の打ち合わせが不可欠である。授業は地形や気候と暮らし、各々の国の地誌のほか、人びとの生活や考え方などについてもふれる。授業でもっとも困難なことは会話であるが、簡単な英語による授業か、それ以外であれば通訳を頼むことが必要になる。

帝国書院『高校生の地理A（最新版）』p.65やp.68～69のモンゴルの記述や写真を体感させるため外部講師をお願いした。また、機会があり、ネパールとタイの講師もまねき授業を行った。

①信州大学のモンゴル人留学生による授業

モンゴルの民族音楽（おそらく追分節）を流して、民族衣装であるデール（遊牧民の衣装）を着て登場する。遊牧民にとっては正装で晴着用であり、乗馬するのに最適である。

モンゴル国は砂漠がある内陸の国である。乾燥

気候のため遊牧が盛んである。遊牧民は約130万人いて人口の半分を占め、残りは都市に定住している。人口の80%は30歳以下で若い人が多い。

地形は高原状であるが、北西部には山地があり、河川もいくつか流れている。南西部には中国から続くゴビ砂漠がある。

気温は年間でもっとも上がる時には40℃にもなるが、冬季には-40℃になることもある。年降水量は多くも350mm（長野市は901mm）であり、そのため国土は草原（ステップ）か、砂漠である。

農牧業では遊牧が主で、羊、ヤギ、ラクダ、牛、馬が主要五畜といわれて飼育されている。ラクダは南部の乾燥地で飼われ、馬は北部の一部では食べるが、一般には食べない。モンゴル人にとって馬は家族同様に尊敬され、移動手段や乳は馬乳酒となり人間にとって必要不可欠な動物である。そのため馬は子馬のとき、ゲル（移動式テント）の中でともに暮らす。羊は一番食べられ、お祭りなど行事のときは『晴れの食事』として使われてきた。また肉を腸詰にしてソーセージを造る。ヤギはカシミヤヤギがゴビ砂漠で飼われ、毛を加工する工場が各地にあり、重要な輸出品となっている。

モンゴルの餃子であるポーシュル（小麦粉の皮にひき肉を入れて、油であげたもの）とボース（肉とニラの入った蒸し餃子）、代表的なお茶であるスーティ茶（馬の乳が入手できないので、牛乳で煮つめてモンゴル製の磚茶を入れる）をつくる。

②ネパールの私立高校の校長による授業

アジアの掛図や黒板にネパールの略地図をかき、ネパールの位置や地域の特色を知る。人口は約2300万人（2003年）であるが1970年には1000万人であったので25年間で倍増している。面積は14万m²で日本の3分の1である。

人口の多くは標高1200～2500mの間に住み、エクメーネの高距限界は5000mで、ヒマラヤ山脈の

森林限界まで居住している。気候ではネパールと
いえば山岳地帯で高山気候であると考えられて
いるが、ネパール南部は亜熱帯気候もあり、バナ
ナの栽培や象もいる。また、乾季と雨季の違いが
明確で、雨季の5～10月には洪水が頻発する。7月
が一年中でもっとも気温は上がり、30℃以上の日
があるが、日本ほど蒸し暑くはない。

ネパールはヒマラヤ山脈の山中にあり、ヒマラ
ヤ山脈のできたときは海中にあった。また世界最
高峰のチョモランマ(エヴェレスト)は、ネパール
人にとっても「神の住む山」、「心の故郷」として
特別な存在である。ネパールでは、ヒマラヤ山脈
は貴重な観光資源である。多くの外国人と接する
機会があり、身近に国際化を感じている。国際化
という概念はなく、外国人と接することは生きる
手段でもある。



ネパールの私立高校長による地理授業

農業では主食となる米、トウモロコシ、シコク
ビエ、麦が農地の3分1を占めている。農地の20%
で米をつくり、1200m以下は水稻で1200～2000m
までは陸稲を栽培している。また蕎麦(標高1000
～4000m)を栽培し、蕎麦スープとして食べる。
日本の「蕎麦がき」には驚いたがおいしかった。
麦は小麦と大麦で3000m近くまで栽培している。
小麦粉を使ったナン(煎餅)や大麦を用いたツァ
ンパに加工されている。畑地の肥料は家畜の糞で
ある厩肥であるが、中でも牛糞が多い。

宗教はインドの影響が強いため、ヒンドゥー教
徒が多い。国民の信仰心が厚い。

ネパールの貨幣を解説し、中でも5ルピー紙幣
にあるウシ科のヤクの図柄からも、ネパールの国
民にとってヤクは重要であることを示している。

ネパールの代表的な料理としてチキンカレー

(ククラカレー)とサグプリー(ハウレンソウパン)
を作る。カレーはインドカレーと同じで、ネパ
ールでは羊の肉が多い。

サグプリーはハウレンソウをゆでてつぶし、小
麦粉を混ぜて練り、揚げたもので、カレーと一緒
に食べてみた。これは意外においしかった。

③タイから嫁いだ二人の女性による授業

タイ出身の女性であるが、二人の出身地が違
うため食べていた米の種類が異なる。一人はタイ最
北部で中国に近く米は糯米を栽培している。もう
一方は南部の首都バンコクに隣接している地域の
生まれで、梗米がほとんどであり種類も100以上あ
る。ここではタイの稲作は、一般的には雨季(5～
10月)に栽培している。また近年稲作面積は減少
して、商品価値の高いキャッサバやパイナップル
に移行しつつある。

米を使用したものとしてタイ式カレーをつく
った。タイ式カレーとはココナッツミルクやナン
プラー(魚・塩・エビ・パイナップルの皮を2～3日
漬けたもの)を入れ、食べると甘さとくさみが混
じり、体験したことのないカレーであった。

タイは人口の95%が仏教徒である。ワットと呼
ばれる寺ではミニスカートやジーンズは禁止であ
る。僧侶は1日2食で、結婚しないし毎日修行に
励んでいる。輸出品は電気・電子機械がもっとも
多いが、食品加工品としてパイナップル缶詰や織
維品が続いている。日本へはエビ、チーク製の高
級家具、焼鳥用の鶏肉などが輸出されている。

3. おわりに

外国人の講師の授業は、それぞれの立場や経歴
等によって異なる。しかし万国共通なのは、食文
化である。実際に現地の民族料理をつくることで、
相手と会話ができうちとけることができる。さら
に一層の関心度が高まる。外国人にとっても自国
をアピールして、より日本人に知ってほしいと考
えている。

このような企画は実行するまでがたいへんであ
るが、その都度驚きがあり、生徒の反応も大きか
った。